

倉橋惣三協会交流会  
2024.4.14.

## 園児から見た幼稚園主事・倉橋惣三

—「お茶の水幼稚園」卒園生への質問紙調査から—

浜口 順子

# 掲載号

『幼児の教育』 2023～2024冬号

第123巻第1巻 p 44～ p 59 (タイトルp59)

2016～2017年に実施したお茶大附属幼稚園

卒園児同窓会「ちぐさ会」の元園児たちに実施した

アンケート調査の結果・分析報告

# 倉橋 惣三

1882（明15）～1955（昭30）

- 大正期から昭和24年にかけて **3期**、  
**「お茶の水幼稚園」\*の主事（園長）** を務めた。

\* 東京女子高等師範学校附属幼稚園の俗称  
（当時、御茶ノ水・湯島にあったため）

第1期） 1917年11月～1919年12月

第2期） 1922年3月～1924年12月

**第3期） 1930年11月～1949年12月（今回のアンケートの対象時期）**

# 研究動機

- ◆「倉橋は、保育を「生活」と捉え、子ども、保育者、保護者と実際に交わった経験を理論に活かそうとした研究者である。その意味で、お茶の水幼稚園というフィールドで長い間主事職に在った意義は特別である。（P59）
- ◆子どもの「さながらの生活」や「心もち」を重んじた倉橋は、主事として保育の場においてどのように映っていたのか、そして、主事として保育者たちと共にどのような幼稚園を実際に築いていたのか（P57）
- ◆同窓会（ちぐさ会）名簿が存在し、倉橋主事を知る同窓生は高齢に達している。



かつての園児たちに質問紙調査をしてはどうか。

## ◎本論の目的（p57=p3）

- 1) 倉橋が主事を務めたお茶の水幼稚園の実践において、「生活さながら」「心もち」を尊重しようとする保育実践が、園児たちにどのような届き、生涯においていかに心に留め置かれてきたのかを知る手がかりを得る
- 2) 倉橋の第3期主事時代は、日本が軍国主義的傾向を増大させ敗戦の形で終結を迎えるに至った時代。国家的要請と幼児の環境・教育の保全との間で板挟みになっていた幼稚園運営のただ中で、その深刻な状況が子どもにどう経験されていたかを探る

# ◎研究方法

## ■質問紙法（3つの設問、p 57）

- ① 倉橋に直接会ったことがあるか  
「はい」「いいえ」「よく覚えていない」 の3件法
- ② 倉橋について覚えていること、ほかの人から聞いたエピソードなど  
自由記述
- ③ 倉橋以外の先生や幼稚園についての思い出  
自由記述

【対象】 倉橋が最後（第3期）に主事（園長）を務めた  
19年間（1930年11月～1949年12月まで）の  
在園児（1930（昭和5）卒～1951（昭和26）卒）で、  
同窓会名簿で生存・現住所が確認できる方

【調査時期】 2016年12月～2017年6月

【配布法】 発送、返信共に郵送  
配布数930通（回収229通、回収率24.6%）

\* お茶の水女子大学人文社会科学研究所の倫理審査で承認済み。

# ◎結果と考察

## (1) 回答状況

最高齢（昭和6年卒生）：91～93歳

最若齢（昭和25年卒生）：72～74歳（回答時推定）

| 回答内容の分類                 | 回答数              |
|-------------------------|------------------|
| A 倉橋に関する記述が中心           | 110通<br>(48.0%)  |
| B 倉橋以外の教師や事柄に関する記述が中心   | 76通<br>(33.2%)   |
| C その他<br>(記憶にない、回答不能など) | 43通<br>(18.8%)   |
| 合計                      | 229通<br>(100.0%) |

左の表は、2019年の日本保育学会大会における口頭発表時の資料から引用



## (2) 倉橋主事に関する回想

倉橋惣三に関する想起内容について

(類似した回答があったもの)

### 1) 外見 (p 55)

- ・ 表情 (笑顔、ニコニコ、やさしい)
- ・ 服装 (グレーの背広、三つ揃い、眼鏡)
- ・ 体格 (小柄、ちょっと肥った、恰幅)

写真でみるイメージと矛盾していない

## 2) 子どもとの身体接触、ふれあい (p 55—54)

- ・ 「腕にぶら下がった」 「手を握った」 「まつわりついた」  
「ぶら下がるようにしてくっついて歩いた」
- ・ 「抱っこ」 「手を振る」 「まつわりつく」
- ・ 「おじちゃん」 「おじちゃんせんせい」 などと愛称で呼んでいた

▼園長室の廊下側の窓から、首を出し、「先生！」と呼び、サッと首を引っ込める。先生が「ハイ！」と返事をなさり、ごらんになると誰もいない・・・廊下側の窓は開いていた。お忙しいのに、よく、何回もつき合ってくださいました。今になって思う。さきごろ久しぶりに（幼稚園に）行ってみて園長室が日当たりの悪い側にあるのに気づき、胸をつかれた。【昭21卒】

▼父から聞いたことですが、父が私のことを先生に「よろしく  
お願いします」と申し上げたところ、先生が私の胸に大きな  
丸印をかいて下さったとのこと。【昭16卒一部】

- ・ 父親からの伝承
- ・ 言葉でなくからだで伝える倉橋の表現

### 3) 保育者と話をする姿 (p 54)

保母たちと事務的な相談を倉橋と頻繁にしていたのであろう。  
このような姿が数十年後になっても卒園児たちの記憶に残っていることは興味深い。(幼児の視線がどこに向っていて、何を感じているか)

- ▼ 遊戯室に来られて、女の先生と暫く話をされて立ち去られました。  
【昭14卒一部】
- ▼ 倉橋先生と私の担任の堀合先生（当時は上遠先生）が附属幼稚園の廊下で立ち話をしておられ、私は担任の先生と手をつないでその場に共に居るといふ情景を覚えています。 【昭23卒】

『育ての心』に収められている「飛びついて来た子ども」という文章はこのような状況の中から生まれた省察であったのではないか。

## 4) 威厳ある偉い人 (p 54—53)

「やさしい先生」とは対照的に、保育者とは異なる厳しさや威厳などの印象が園児に刻まれている

▼笑顔で、どっしりと立っていらっしゃいましたが、そのお姿の中に『ここまではいいですよ、何をしてもでもここからは貴女には早すぎます』と語るような厳しい規律がありました。【昭15卒一部】

▼とても偉い倉橋先生が最敬礼されるお姿を拝見して驚きました。皇后陛下行啓の折でした。【昭17卒一部】

▼倉橋先生は在園中のそれはそれは厳しいお顔をされた近寄りがたい主事先生という印象でした。【昭18卒二部】

大人としての威厳、そして、昭和16年12月の開戦以降は社会状況の緊張との関係が示唆される

## 5) 子どもに丁寧に話をする (p 53)

▼ (亡夫の代理で回答してくださった方の話) 同じクラスのいたずらっ子3人組でいつも仲良しで何事にも興味を持ってすぐに行動に移す。ある日、主事室にかざってあった帆船を持ち出してお池に浮かべて遊んでしまった。教生の先生が見つけて泣きながら叱られたそう。3人はびっくりしてお部屋にかくれてしまった。が倉橋主事先生の所にあやまりにいかされたそうです。主事先生は、「それでお船はどうになりましたか？」子供達「沈んでバラバラになっちゃったー」「そうかい、あのお船はのりで紙と布地をはって作ってあるのですヨ、つまらなかったね」先生はニコニコとふちなし眼鏡の奥で笑っていらしたそうです。【昭14卒二部】

▼ お机の上に柑橘類の枝が花瓶にさしてあり、その時かぐや姫のお話の中で求婚者の男性の一人が姫からとりに行くようにいわれた木の仲間の木ですよ、というような話をしてくださいました。とても風格のある偉い先生なのだと幼な心に強く感じたことを覚えております。【昭19卒一部】

★このようなエピソードを80年以上たっても覚えているということ

- ・ 叱られると思ったけれど、道理を通して許す大人との出会い
- ・ 日常的な会話の中に、昔話（文化）とのつながりを感じさせる

# (3) 倉橋主事以外のことで幼稚園について記憶していることについて

## 1) 東京・大塚の新園舎への移転 (p 52)

1876 開園以来、御茶ノ水（湯島）にあった

1923 関東大震災で全焼

1932 現在の大塚園舎に移転

▼私は昭和7年、御茶ノ水の校舎の最後の卒業生です。

卒業式だけは前年、大塚の現在地に完成していた後者の広い室  
でした。【昭7卒】

▼幼稚園は最初は御茶ノ水の駅のそば、入り口に「大きな銀杏」があり、  
下は貝塚、そこで遊ぶ。2年目に大塚、窪町に移る。確か江戸時代の墓地跡  
とか、土の中から木箱が出て、人骨が出ました。見に行き、女の子は  
恐る恐る覗きました。【昭9卒】

## 補足

### ◆先生（保姆）の服装

保姆はほとんど和装で、洋装の先生をめずらしがる。

### ◆お弁当を温める部屋

- ・ 玄関から入ってすぐ右側にお弁当を温める部屋があって、そこから・・・【昭12卒】
- ・ お昼には炭火堂で暖められた温かいお弁当をいただきました。【昭23卒】



## 2) クラス編成 (p 52-50)


当時のお茶の水幼稚園は、「2部制保育」である。

1912年～、お茶の水幼稚園では学年混合制のクラス（分室）を「二部」として設けた。

研究対象の時期はおおむね：

【第一部】 満4歳から（保育時数：週各25時間）保育料33圓 森>山・川>海

【第二部】 満3歳から（保育時数：週各28時間）保育料11圓 林>池

 保育料は1932年に同等になる

\* 表 1 (p51)参照

## ◆各組の独立性が高く、各担任の特色がより濃くクラス運営

「子どもが持ち上がり、担任は変わる」

「クラス同士の交流は少なかったかもしれない」

## ◆一部と二部の違いへの意識

「入園志望者をだすとき、大体の家庭では一部と二部とを合わせ希望するのが普通であるのに、二部を志願しない家庭は三十名ぐらいあったのである。こんな状態は年を経るにしたがって少なくなり、ほとんどが、たとえ月謝は安くても二部を特別視しないようになってきた」「・・・ときとして二部の幼児と一部の幼児とが対抗して石などをぶつけあったこともあったとか」

(菊池ふじのの回想から 1966)

## ◆卒園後の進路の違い

少なくとも昭和初期は下のような違いがあった。

|             | 男児一部 | 男児二部 | 女児一部   | 女児二部 |
|-------------|------|------|--------|------|
| 東京高等師範学校附属小 | 7    | 2    | —      | —    |
| 女高師附属小      | 7    | 2以上  | 25（全員） | 3    |
| 市内公私立小      | 18   | 2以上  |        | 8名中3 |

醫峰生（1926）による

### 園児への「お受験」プレッシャー

- ▼（思い出すことといえば）小学校の試験に落ちて戸棚の中に入って泣いた事です（昭和17年卒 一部男児）

### 3) 入園検定 (p 50~49)

お茶の水幼稚園では当時から入園者選抜の検定が行われていた。

1926年当時：抽籤→精神発達考査という2段階の選抜

男児一部36名 (3.3倍)、同二部13名 (7.7倍)

女児一部24名 (10倍)、同二部17名 (11.9倍) が合格

(一部と二部を両方志望する者がおり延べ人数)

▼入園テストに行きました時テストの部屋に入る前の所に立っていらして「遠いところから良く来たね」とにっこりしてくださった倉橋先生のお顔が今でも目に浮かび印象に残っています。【昭10卒一部】

課題例：「かごを持って八百屋さんでトマトを買ってポストに手紙を入れてきてください」

(昭和10卒) 「日の丸をお書きなさい」 (昭和11卒)、投げたボールと競走してどちら

が早くゴールに着くか (昭和13卒)

▼入園試験を前に、母に連れられて予備校（？）に通いました。

と言っても机を並べた学校形式ではなくて普通の家の卓袱台に座り、絵を描いたりしたことを覚えています。他にも、数人居たように思います。お蔭様で試験はパスし、抽籤にも当たり入園することが出来ました。

【昭和16卒一部】

幼稚園への「お受験」競争がすでにあった。

## 4) 皇太后を迎える (p49)

女高師はその設立から皇室との関係が深く、皇族が来訪するとお茶の水幼稚園にも立ち寄ることがあった。

▼幼稚園時代の思い出の一つは、貞明皇太后様が通察に来られた時です。園児達は木の箱に四本足をつけ象や虎の頭を貼りつける工作をしていました。恐れ多いのでお顔を見上げないようにとのことですぐ傍を皇太后様ほかの足が通って行かれた記憶があります。【昭和12卒二部】

ここで行われている動物園遊びのための工作は、倉橋主事が子どもの「本真剣」(倉橋がつかった「集中」や「専念」を表す言葉)を示す遊びの例としてキンダーブックにも絵で紹介された誘導保育活動の一端である。

皇太后の「尊顔を拝す」ことが許されないという時代特有の教育を伝えている。

## 5) 戦争と幼児 (p49)

### 《社会に広がる緊張感を感じる》

▼ 銀杏の実拾いや藤棚の下での遊びなどの中に、最後になって急に戦争にまつわる出来事が記憶の中に混ざってきたように思っています。例えば、帰る時玄関でお迎えの人に子供を渡す時いつもよりも緊張した感じで身元を確認するようになったように幼な心にも覚えています。あれは12月8日の後、しばらく続いたような気がします。また、翌年の1月シンガポール陥落の祝賀パレード（旗行列）の際、ゴムマリ（軟式庭球のような感じで赤く、何か判が押されていました）が1人に1つずつ配られたことを覚えています。当時は物資が不足し始めていた時で、ゴムマリは子供にとってすでに貴重品となっていたので、皆、大はしゃぎだったことを覚えています。

【昭和17年二部】

お茶の水幼稚園では子どもの送り迎えの際に、1929年から「もんかん（門艦）」というIDカードのようなものを持たせ間違いなく引き渡せるようにしていたが、その時間の様子も厳重になったと幼児に感じさせていることに注目したい。

## 《戦時下の遊び》

- ・ 戦争する大人の姿をまねるごっこ遊び
- ・ 防空壕の中で無邪気に遊び叱られる姿

▼何しろ「戦争ごっこ」が強烈で男の子は木の枝を振りかざしお山の方へ突撃、それはそれはいきいきしておりました。その気魄に圧倒されて女の子は看護婦さん役で必死に看護しました。もんぺ姿の担任の清水先生がいつもニコニコ見ていらしたのを覚えております。【昭和19卒一部】

▼幼稚園の防空壕の中に皆で入った。天井の木組みのなかに織り込まれていた松葉を引き抜いて、友達的首筋をつついて怒られた。防空壕に入る時の歌はなぜか今でも覚えている。  
(♪敵機の爆弾こわくはないが……) 【昭21卒二部】



## 《戦時幼稚園》（p 48-47）

1944年5月、東京都は公私立の幼稚園などの保育施設に対して**全面休止措置**（文部省1979, 213）。

お茶の水幼稚園は独自対応をとり、延長保育を行う（朝8時から午後3時まで）

→ But 空襲警報が頻繁に発せられるようになり、9月1日からは通園時間10分を超える者は休園とする。

→その代わりに、

- ・ 近隣の幼児を入園させたり、
- ・ 女高師内にあった貞秀寮（戦争未亡人のための東京特設中等教員養成所「玉成舎」裁縫科の宿舎）の幼児27名受け入れ
- ・ 夕方5時頃まで延長保育を行うこともあった。（菊池1967）

昭和20年3月9日の東京大空襲の後、3月16日に「戦時幼稚園」は休園

この年の卒園児には証書が郵送（菊池1967, 32）。

倉橋主事は、非常時こそ

「広い園庭をもつ幼稚園の方が安全」であり

「おとな（……）の手は、それこそ非常時の忙しい母よりはゆきとどいて」と、  
「幼稚園」の看板を降ろすことはしなかった。

「（世の中は非常時と騒ぐが）幼稚園は非常時的でないから、戦時保育所と名をかえろというおふれ（……）は、彼（倉橋）の理解しがたいことであった。」

「主事としては文部省に幾たびか足をはこばなければならなかった」（倉橋 1965b, 277-278）。（倉橋『子供讃歌』）

★特別措置で受け入れた幼児の組は3人の保育者が担任し、表1にあるとおり72名卒業している。

## 《戦後の変則的保育から日常へ》 (p47-46)

1945年9月26日には幼稚園再開の準備開始、疎開者がぽつりぽつりと帰京し保育者数もそろわない中、近隣の町会長の協力も得て園児を募集。

1945年11月、35名の園児を集め保育開始式を行った。

翌年4月には復園した幼児と新入園児を含め、4歳児3組、5歳児3組の6編成（森・川・山・海：一部、林・池：二部）となった。（菊池1967）

▼私が入園したのは昭和21年5月です。卒園は昭和22年3月。これは非常に特殊なケースです。昭和21年4月に一年保育を受入れ、更に補欠を5月に募集していたそうです。戦争で、焼野原だった東京に子供の遊び場がない為特別設置だったと聞いております。私が入ったのは元々年少の山の組でした。従って同年会の友人他、2年下の人達の混ざったクラスでした。今思えば非常に不思議なクラスですが、幼い当時に何も疑問も持たず楽しく過ごした11ヶ月でした。

【昭和22卒】

# 戦時体制～戦後混乱期の 倉橋の「幼稚園」へのこだわり

## ★幼稚園という名前への意味付与に倉橋の執念がある

- ・「戦時だから」保育所や託児所に名を変えることへの抵抗
- ・「保育」（福祉）と「教育」を分ける行政や社会の考え方への批判

★戦争という状況下でこそ、フレーベルの思想（仕事に忙しい親の元とは別の生活の場をつくる）を実践できる充実感があったのではないか  
（歴史の皮肉でもあると思う）

★坂元彦太郎に戦後の幼児教育施設の名前を相談され、「幼稚園」ではなく「幼稚園を続けてほしい」と語ったエピソード

## ◎まとめと問い

倉橋惣三はの『育ての心』の上巻が今でもよく読まれているのは、現代人が読んでも響く普遍性をもっているからであろう。

しかし下巻があまり話題にされないのは、その時代性が色濃く出ているからではないか。

今回のアンケート結果から、倉橋の時代性、現代との違いを考慮して、倉橋への疑問を意識化したり、新しい理解へのヒントについて考えていただけたら、と思います。

\* \* \* \* \*

女高師・お茶大附属幼稚園同窓会「ちぐさ会」のご協力に深く感謝申し上げます。